



連載

常陸時代の佐竹氏  
— 500年の軌跡を追う —「五本骨扇に月丸」  
の佐竹氏家紋

## 【第11回】

## 10代義篤、室町幕府侍所頭人に就任

## 佐竹氏の居城、太田城

JR水郡線の上菅谷駅で乗り換え常陸太田市へ向かう。JR常陸太田駅から通称「鯨ヶ岡」と呼ばれる台地にある同市の旧中心街を目指す。しばらく行くと道がY字型に西と東に分かれる。それぞれの道は、同市宮本町の太田郵便局附近で再び結び付く。西側の道は急な下り坂で、台地下で平地の道とつながる。一方の東側の道は旧商店街を抜け、同市馬場町の馬場八幡宮の附近から下り坂になる。

馬場八幡宮へ行く東側の道を途中から左側に折れると、茨城県立太田第一高等学校がある。道は同高校正門前を通り、台地下の平地の道に合流する。この台地にあった中世の太田城について「復元図」を作成した余湖浩一氏は「中世太田城の復元的考察」(『常総中世史研究』第8号=2020年、茨城大学中世史研究会発行)の中で太田城の規模を郭の位置を示しながら以下のように述べている。

同高校附近を「北城」、太田郵便局あたりは「南城」とし、この間に各区画を示す郭があった。「南城」から順に「馬出」、「御城」、「中城」、「三の丸」、「四の丸」と続く。城の東側は馬場八幡宮に至る旧商店街の道。西側は太田郵便局から西に下る道の右側崖。これをみると、太田城は、同市の旧中心街の大部分を占める。「太田城は戦国佐竹氏の居城としてふさわしい大城郭であった」と余湖氏は指摘する。佐竹氏はこの大城郭を築くまでに多くの戦いと苦難を経ている。その最大の試練が全国規模で繰り広げられた南北朝の戦いだった。

## 義篤、侍所頭人に就く

南北朝時代の文和元年(1352)、足利尊氏と争っていた弟の足利直義が鎌倉で亡くなった。毒殺された、ともいわれている。この後、尊氏は鎌倉を立てて京都へ戻った。一行の中には最初から北朝側の足利氏と共に戦ってきた佐竹義篤もいた。尊氏と共に上洛した義篤は文和3年(1354)、

室町幕府の政所などと並ぶ幕府機関である侍所の頭人に就任した。9代貞義以来、佐竹氏が果たしてきた戦功を踏まえた抜擢だった。

侍所頭人は幕府の軍事・警察権を担う長官ポスト。義篤は『京都市史編さん通信No.70』(1975年、京都市史編さん所発行)によると、「文和3年12月から延文2年(1357)5月」までの2年半、務めた。前任者は美濃・尾張・伊勢国の守護、土岐頼康。侍所頭人は緊急時、それなりの兵力を動員できる力をもっていないと務まらない。筆者はその任務を一族の美濃佐竹氏が担っていたのではないかとみている。

文和4年(1355)、尊氏は亡き弟直義の養子で、南朝側についた足利直冬が京に攻めてきた。この時、義篤は死を覚悟したのか、「讓状」(遺言状)を書いている。『佐竹家譜』は文和4年正月11日条で「義篤心に必死の戦を欲し、讓状を書し、尊氏の証判を賜り長子義香に授て曰く」と所有する領地の場所を書き込んでいる。義篤が覚悟を決めた様子が伝わってくる文面である。

## 常陸国の他3ヶ国に領地

尊氏軍は直冬軍に勝った。直冬は石見国(鳥取県西部)に落ち延びた。義篤はその後、侍所頭人を辞し、いったん常陸国に帰国。しかし、再び上洛し、室町幕府2代將軍足利義詮に従って南朝側と戦っている。延文5年(1360)、常陸国に戻ってきた義篤は2年後の貞治元年(1362)、没した。この時も義篤は亡くなる直前に「讓状」を書いている。前の「讓状」と併せてみると、当時の佐竹宗家の支配地がわかる。

佐竹氏は4代秀義の時、「金砂合戦」で奥七郡(茨城県北部)を失った。その後、鎌倉幕府の御家人時代、「承久の乱」の戦功で奥七郡内の酒出などを取り戻した。さらに9代貞義の時、足利尊氏に従って南朝側と戦い、奥七郡を取り返した。加えて常陸国の守護となり、新たな領地も入手し

た。貞義の嫡男義篤は、守護職に加え、室町幕府侍所頭人にまでなった。いわゆる「守護大名」佐竹氏の誕生である。

そこで注目される点が佐竹宗家の領地である。文和4年の「讓状」は常陸国内のほか3ヶ国で領有していた地名を記載。福島県の「陸奥国中野・小堤・佐渡南方・江名・絹谷村」（いわき市）、富山県の「越中国下与河村（氷見市）」、石川県の「加賀国中村村（野々市市）」である。常陸国以外の領地は「義篤の在京活動に対して幕府から与えられた所領ではなかろうか」（『戦国佐竹氏研究の最前線』（2021年、山川出版社発行）とみられている。

## 奥七郡を宗家・分家で支配

また、貞治元年の「讓状」は「康安2年（1362）」の署名年があることから「康安の讓状」と呼ばれている。義篤と嫡男義香（宣）の署名がある。讓与先は義篤の妻や子ども、寺院が中心。所領名は奥七郡の「多賀庄」、「那珂東・西」、「久慈東・西」の各郡内の複数郷村と「佐都西」郡の「伊達村」（比定地不詳）。文和4年の「讓状」に「佐都西大田郷」が載っているのだから「佐都西」郡はわずか2郷・村しか記載がなく、「佐都東」郡はゼロ。

つまり、「佐都東・西」郡の大部分は宗家の領地ではなかったということになる。その理由について市村高男氏は『中世常陸と佐竹氏』（2020年、茨城県立歴史館発行「佐竹氏」収録）の中で「佐都東郡は小野崎氏一族の支配が及んでいる」とし、有力家臣が支配していた。さらに「空白が多い久慈東郡中南部・久慈西郡中南部には義篤の弟師義の所領があり、那珂西郡南部には江戸氏の所領があった」と述べている。

こうした状態から奥七郡は、佐竹氏の支配地に戻ったものの支配形態は宗家、分家、有力家臣による複合的支配になっていた、ということである。特に義篤の弟師義の「本拠地は久慈川の河谷平野から山地帯への入り口に当たる『山の入り』にあったことから佐竹山入家の俗称で呼ばれている」（『中世常陸と佐竹氏』）。こうした奥七郡の複合的支配は、この状態でしばらくの間、何事もなく続いた。

## 静と古内に新たな文化圏

奥七郡の奪還と勢力圏の拡大を果たした貞義、

義篤親子は、菩提寺があった「太田郷」増井以外の地にも新たな禅宗寺院を建立した。1987年発行の『瓜連町史』は貞義が貞和元年（1345）、「那珂郡の静神社の境内に帝青山弘願寺を建立。開山は大拙祖能」と述べている。静神社境内に建立したことから「神社を守る神宮寺の役割も与えられていたのであろう」（『同町史』）と指摘する。

義篤も静神社境内に静安寺を建立した。静神社発行のパンフレットに「殷賑をきわめた霊地」と題して「かつてこの付近は、現在の静神社を中心として三つの神社が鎮座し、更に七つの寺院がこれを囲んで大きな霊地を形成していた」と書いている。7ヶ寺の中核となっていたのが弘願寺と静安寺である。江戸時代に静神社の神社と寺院は分離される。弘願寺是那珂市下大賀の現在地に移った。静安寺は移転を繰り返して、廃寺となった。

義篤は城里町下古内に清音寺も建立した。『城里町史』（1988年発行）は、亡き父貞義の「百日忌のため復庵宗己を招聘して那珂西郡古内に菩提所として太古山獅子院清音寺を開いた」と記す。これらの寺院建立は、南北朝の争乱で勢力を得た佐竹氏が自らの権勢を示す象徴的な動きといえる。従来の増井の文化圏に次ぐ新たな文化圏を静と古内に誕生させた。佐竹氏が南北朝時代後期にみせた輝きだった。

歴史ジャーナリスト  
茨城県郷土文化研究会会長  
富山 章一



佐竹氏の本城・太田城は別名「舞鶴城」とも呼ばれ、常陸太田市立太田小学校の敷地内に「舞鶴城」と刻まれた記念碑が建っている＝常陸太田市中城町